

三藩市唐人街の社会構造 (五)

— 広肇帮の典型 —

内田直作

七 堂会 = Tonggs, or Huis

イ 堂会の普及

如上、三藩市中華總會館の下位団体の地縁団体としての六公司——Chinese Six Companies (実数は七会館)と、一姓、もしくは数姓の合同により組織される有力姓氏団体について概観した。

ついで、右のような有力な上層の地縁団体、姓氏団体を形成しえないで、比較的経済的に下層の勢力微弱な小姓や少数の孤立的勢力が黄・李・余・陳・竜岡等の諸大姓に対抗するために、中国固有の秘密結社の組織を採用して、堂 = Tonggs もしくは工商總會のとき会 = Huis の名称をもって、いわゆる「堂会」を結成する場合がみられる。中国人社会の多くの集成的・同郷・同業・友誼的諸団体のみならず、店舗・家庭等における集会場所、

三藩市唐人街の社会構造(五)

客庁のごときホールにつけられた「堂名」を当該団体、店舗等の通称として慣用される場合が少くない。だが、アメリカの各都市の唐人街における「堂会」を特徴づけるものは秘密結社組織を採用し、器械(武器)をもつ自衛的闘争団体であったことである。ことに、中国に固有の秘密結社がその開設に際していわゆる「開山設堂」によりまず「堂」を設置することに起因するものともみられる。宋代の故事「水滸伝」(又の名、江湖豪客伝)における大爺「宋江」が天畏星三十六員、地銘星七十二座の魔君の百八徒を結集して「梁山忠義堂」を設立したのもその一例である。他面、本稿(二)(本誌第二十一号、第一一七—一二〇頁)のうちにも明らかにした西路事件に際して、アメリカ華僑の母体ともいふべき四邑集団の土属の自衛的闘争団体に「元勝堂」や「安良堂」のごとき堂名の団体が結成されていたが、出先の加州でも郷土の習俗にしたがって、器械をもつ闘争団体に堂名が自然に踏襲されたものとも理解される。

東南アジア方面では秘密結社的な械闘団体は多くの場合、公司カンパニー || Kong sai と呼称されていた。海山公司・義興公司・福義興公司等これであって、堂名でなく公司名が採用されたことは、東南アジアでは当時ヨーロッパ諸国の東インド会社の武力的活動に当面してコンパニー(公班衙)名称が慣用されていたことによるものとみられる。さらに、アメリカの械闘団体がとくに堂名を採用したことには公司名が上位の六公司に限定されていたことと、その規模が東南アジアにおける諸公司と比較する場合、問題にならないほど小規模であったことにもよるものといえよう。なお、初期の堂闘には専ら斧頭を武器としたから斧頭仔 || Hachet men もしくは「斧頭仔堂」とも俗称され、時としては堂会は「山頭」とも呼ばれていた。

堂会の所在地 || アメリカにおける堂は一八五二年に成立した広徳堂 || Kwong Dock Tong がその最初のも

のであった。一八五四年には協意堂（もしくは俠義堂）＝Hip Yee Tong の成立をみた。また、マックレオドの説によると、サンフランシスコにおける諸堂のうち、最初の有力な堂は、致公堂＝Chee Kung Tong であつたともされている。⁽²⁾ 致公堂成立の年度は明らかになしたが、アメリカ華僑で安良堂の領袖であり、戦後中華人民共和国全国人民代表大会常務委員会委員、同華僑事務委員会委員、中国銀行監察人の任にあつて北京で逝去した司徒美堂＝Su-tu Mei-tang（広東省開平県人、1866—1955）は一八八〇年十四才で苦力移民として渡米し、一八八三年十七才で反清の洪門系の致公堂に参加したといわれるから、⁽³⁾ 当時にはすでに致公堂の存在が明らかにされる。その後、械闘団体として積極的な役割を果した堂について、サンフランシスコに存在するものについては、司徒美堂が華文名であげるものと、⁽⁴⁾ マックレオド＝Alexander McLeod が英文名であげるものには何れも次のごとく一二団体がある。⁽⁵⁾ 華文名と英文名と前七団体は相一致するが、後の五団体については不明で、一致せしめがたい。マックレオドのそれはサンフランシスコにおける堂会名で、司徒の分は同地以外のものも含むものとみられる。

(司徒美堂)

(マックレオド)

致公堂

＝Gee Kung Tong

萃勝堂

＝Suey Sing Tong

秉公堂

＝Bing Kung Tong

協勝堂

＝Hip Sing Tong

合勝堂

＝Hop Sing Tong

三藩市唐人街の社会構造 (四)

安益堂

〓〓 On Yich Tong

瑞端堂

〓〓 Suey On Tong

聚良堂

? Bow Leong Tong = 秉公保良堂

竹林山房

? Sem Suey Ying Tong = (萃英堂)

華亭山房

? Kwan Dock Tong = (広徳堂)

協英堂

? Hep Sun Tong

安良堂

? Bow On Tong = (岡州保安堂)

司徒美堂は、右のほかに、ニューヨークに存在するものには、「安良総堂」と「協勝分堂」の二堂があり、三邑(南海・番禺・順徳の三県)系下属の堂で各都市に散在するものには、「秉安堂」・「昭義堂」・「松石堂」・「西安堂」があり、香山県(現在名中山県)系下属の堂には「段英堂」があることを明らかにしている。さらに、彼が主宰する「安良堂」の分堂一一団体、支堂七一一六団体がワシントン・ヒラデルヒア・セントルイス・デトロイト・ピッツバーグ・ボルティモアー・プロビデンス・ボストン・シカゴ・サンフランシスコ等の各都市に散在し、ニューヨークの「安良総堂」の指揮下にあるとしている⁽⁴⁾。

次に、陳匡民がその編著「美洲華僑通鑑」(一九五〇年刊行)に明らかにするところによれば、各堂会の所在地は次の通りである。⁽⁵⁾

「致公堂」(中国洪門民治党)〓ニューヨーク(総堂)・ワシントン・サンアントニオ・ボルティモアー・ニューヨーク・シカゴ・フェニックス・タスカン・メリーズビル・シアトル・サンフランシスコ・カナダ(バ

ンクーパー・ビクトリア・トロント・ウィニーペッグ・モントリール）・キューバ・メキシコ

「安良堂」(安良工商会) Ⅱ ニューヨーク(総堂) ・ワシントン・リッチモンド・ノーフォーク・サンアントニオ・ファウストン・プロビデンス・ピッツバーグ・ヒラデルヒア・コロンブス・バッハアロ・オルバニー・セントルイス・カンサス市・グリーズビル・ミネアポリス・デトロイト・ボストン・ボルティモアー・シカゴ・サンフランシスコ

「協勝堂」(協勝公会) Ⅱ サンフランシスコ(総堂) ・シアトル・シカゴ・ヒラデルヒア・ニューヨーク・ミネアポリス・ボストン・ワシントン

「兼公堂」 Ⅱ サンフランシスコ(総堂) ・ポートランド・サンディエゴ・サクラメント・オークランド・ロスアンゼルス・フレズノ・コートランド・ベーカーズフィールド・シアトル・スタックトン・サンタバーバラ・ワトソンビル

「合勝堂」 Ⅱ サンフランシスコ(総堂) ・ロスアンゼルス・ポートランド・メリーズビル・サンタバーバラ
「萃勝堂」(萃勝工商会) Ⅱ サンフランシスコ(総堂) ・オークランド・スタックトン・ポートランド・シアトル・メリーズビル・ワトソンビル

「英瑞堂」(英瑞工商会) Ⅱ サンフランシスコ(総会) ・オークランド

「儀英堂」(儀英工商会) Ⅱ サンフランシスコ(総会)

「俊英堂」(俊英工商会) Ⅱ サンフランシスコ(総会)

右によれば致公堂はアメリカの全域性の団体であり、さらにそのほか香港・上海にも支部があり、諸堂のうち

三藩市唐人街の社会構造 (8)

最大規模のものである。安良堂これにつき、合衆国の東・中・西部におよんでいるが、なお概して東部にその活動の中心がある。協勝堂も西・東部にまたがっているが、西部にその中心がおかれている。秉公堂以下の諸堂は専ら西部をその活動範疇としている。

右のごとく、アメリカの広肇幫系華僑社会における堂会は容易に無視しえないほどの有力な存在となつていく。右の諸堂のうち「致公堂」は戦後「致公党」と改名していることから明らかにされるごとく政治的党派としての色彩が濃厚である。他方、本来の「堂会」としては「安良堂」が財力もつとも多く、「協勝堂」は打手(討手)多く鬪争的であり、西部の「秉公堂」は昆仲数がもつとも多いとされている。

先にも述べたごとく、堂会は秘密結社組織であるだけにその組織・活動内容は容易に明らかにしえない。何れも堂友外には固く門戸を閉ざし、致公堂は華文名に「洪門」と冠し、英文名は“Chinese Free Mason”と呼び、秉公堂はフリーメソンのマークを門戸にかかげること等にもその一端がうかがわれる。以下、秘密結社組織としての堂会の輪廓を手許の限られた若干の資料によってあとづけてゆくこととする。

口 秘密結社組織としての堂会

清初から拡大発展をみてきた中国の秘密結社には華北に基盤をおいた「白蓮会」、華中の揚子江流域に発展した「哥老会」、華南の福建・広東両省方面に普及した洪門系の「天地会」(又の名、三合会)——The Triad Society に三大別されうるが、海外に発展をみた秘密結社の系譜は華僑の出身地地方の華南に成立していた天地会・三合会・三点会・七首会・双刀会等の名で呼称される洪門系の秘密結社に属している。⁸⁾

天地会の起源——洪門系の天地会の成立の経過について、平山周著の「中国秘密社会史」のうち明らかにされ

ているところによれば、天地会の起因は福建省福州府浦田県九連山の山中の寺院「少林寺」にあった。少林寺の寺僧が焚香の余暇、軍略・剣法・諸武芸を究め、寺院が武芸教授所に均しい有様であった。康熙年間^⑧1662—1722（もしくは乾隆年間^⑨1736—1795）に中国の附庸国であった西方の西魯の叛乱に際して、清朝の客軍の敗退したことから、少林寺の僧徒鄭君達以下百二十八名が西魯討伐軍に応募し、勇武絶倫西魯征服に成功した。だが、廷臣の陳文耀と張近秋に寺僧に異志あって、朝廷滅亡の怖れありと讒訴され、少林寺は焚焼せしめられる結果となった。遁走した僧侶のうち生存したものは、蔡徳忠・方大洪・馬超興・胡徳帝・李式開の五名にすぎず、その後の反清復明の革命的企図をもつ秘密結社としての天地会の「前五祖」と称せられ、祭祀されるようになった。五僧遁走の途中、張近秋に復仇の際、呉天成・洪大歳・姚必達・李式地・林永超の五人に危急を救済された。この五人がその後「後五祖」もしくは「五虎」と称せられて今日におよんでいる。

安良堂の大哥であった司徒美堂の述べるところによれば、「堂」内の正面には、今日では華僑商人団体祭祀の中心である道教的商業神の「関帝」を奉祀しないで、洪門系の「堂」では、右の反清復明の「前・後五祖」を供奉している^⑩。

五僧は後、湖広に潜み、そこで志を同じくする翰林学士の陳近南に救われ、紅花亭で時期の到来をまった。その時、明末の崇徳帝の孫の朱洪竹が加わり、陳近南を香主として、すでに武装するものを兄とし、後来のもを弟として甲寅^⑪1674（康熙十三年）の年の七月二十五日紅花亭で兄弟盟誓、その日を兄弟の誕生日とし、洪家大会を開いた。東天に紅光の発するをみて、紅と洪と同音の故に「洪」をもって姓とし、「洪」字を数字に分解して「三八二十一」をもって符号^{サイン}とした。

五僧等は陳近南とともに兵馬を募集して清軍を攻撃したが、効果あがらず敗退の際に、万雲寺の院長「万雲竜」(俗名・胡得起、洪門では達宗と呼ぶ)の援助をうけ、大哥(元師)として迎え吸血訂盟覆清を期した。万雲竜は再度清軍を痛撃したが、九月九日陣没した。今日でも洪門系の諸団体では夏曆七月二十五日には五祖を祭り、九月九日には万雲竜元師誕辰慶祝の饗礼を行ない、公宴を開くこととしている。

敗戦後は幼帝の蹤跡不明となり、諸兄弟は解散、江湖山沢の間に体力を養い、口伝暗号をもって広く徒党を結び、洪家結成の期日には来集違約しないことを誓って別れた。別れに際して、「五人分開一首詩、身山洪英無人知、此事伝得衆兄弟、後來相分团円時」の詩を作って、後來永久に会員の証とすることとした。

右の伝説は天地会・三合会・哥老会等多少の差異はあっても、少林寺焚燒、五僧を五祖とする等の点において共通し、瓜代輾転口伝されて今日におよんでいる。⁶⁰⁾

右の洪門系諸団体はその起源についての伝説にも明らかにされる通り、清初から清末におよぶ反清復明の革命的企図をもつ秘密結社としての骨格を具備している。

洪門の名称起源——なお、洪門の名称については、第一説には前述のごとく甲寅七月二十五日紅花亭で兄弟盟誓のとき、東方紅の紅と洪とが同音であることに由来するとの平山周説がみられる。さらに、第二説には洪と紅とは同音であり、紅と朱は同色であり、洪には明室を回復し、胡虜を駆逐することを含意している。すなわち、洪は明朝初代の皇帝の朱元璋の年号の「洪武」の第一字であり、同時に洪は紅であり、紅は「朱」を指すことによるとの説がみられる。⁶¹⁾

第三説は孫文がその著「三民主義」のうちの民族主義第三講において、洪門は洪秀全(太平天国の乱の首領)

からその名称がでたのでなく、朱洪武もしくは朱洪祝（康熙年間の朱洪祝の起義）にその名称が起源するのではないかとの説を明らかにしている。¹⁰² 右の朱洪祝はおそらく紅花亭での兄弟盟誓の小主であった崇禎帝の孫の幼帝「朱洪竹」を指すものと解される。平山周もその著のうちに洪門は道教・仏教を信奉するが、洪秀全の信奉する上帝はキリストの教えにもとづくものである。さらに、洪門は反清復明であるが、洪秀全は反清であっても新朝を建てることを企図するものであって、同一視しえないとしており、¹⁰³ したがって洪門の名称が孫文説と同様洪秀全に起因することを否定している。

第四説は蕭一山が「洪」字起源に関する正確な説として洪門の耆宿の説を紹介している。すなわち、「洪」は「漢」の省略されたもので、漢族が中原の土地を喪失して、鄭氏が台湾に明朝復興の基地としていたことから、「漢」の字から中間の「中土」を除去すると、自然に一個の「洪」の字に変成する。このことは洪門では「清」を「涖」とかくのは清は無主を意味し「滿」を「溷」とかくのは滿の無頭を意味せしめることと共通する扱い方である。したがって、「四海九州尽姓洪」・「滴血盟心本姓洪」は、すなわち「四海九州尽属漢」・「滴血盟心本為漢」を意味するものであって、もっとも信頼すべき正確な「洪」説の起源としている。¹⁰⁴

そのほか、洪門は漢留（漢民族遺流）に起こり、始祖は「殷洪盛」、又の名「洪英」であり、洪門の名称の起源とする説がある。殷洪盛の真実の姓は日本に流亡した明末の儒者の朱舜水（浙江余姚人、1600—1683）であり、殷は紅であり、紅は朱である。舜時には洪水が盛んであり、大禹をしてこれを治めしめたことから洪盛の二字を用い、したがって殷洪盛は朱舜水の化名とされている。だが、蕭一山は朱舜水と福建に開創された洪門との間には何等の交渉はなく、「漢失中土」説をもって正しいとしている。¹⁰⁵

洪門団体の別派——上述してきた少林寺焚焼に縁由する洪門団体のほかに、明末清初の反清復明のために尽瘁した著名の先賢五名をもって、五祖として奉祀する支派ともみるべき目標洪門団体もみられる。五祖とはすなわち日本に亡命した大儒の「朱舜水」（諱、瑜・字、魯瑛、浙江余姚人、1600—1683）、棒学の開創の「顧亭林」（原名、緯・改名、炎武、江蘇崑山人、1613—1682）、陽明学派の「黄梨洲」（名、宗曦・字、太冲・一字德水・号、南雷居士、1610—1695）、攘夷の学者の「王夫之」（字、而農・号、薑齋、湖南衡陽人、1619—1692）、任俠尚義の金石学者「傅青主」（諱、山・字、青主、山西陽曲県人、1605—不明、八十余才没）等の反清復明の気魄にみちた五先賢をもってしている。さらに、この五祖のほかに「文宗」として忠烈の文官の史可法（字、憲元・一字道鄰、原籍、文興・寄籍、河南祥符、1604—1645）、武宗として感慨非凡の鄭成功（名、福松・又名、森・号、大木・字、明儼、日本平戸生、福建泉州人、鄭芝竜の長子、1624—1662）が併祀される⁵⁶。

本別派の五祖・文武の両宗は何れも明末清初に傑出した反清復明の康熙の儒者・武将達であって、その籍貫（出身地）は鄭成功の福建泉州以外は何れも共通して華中・華北方面であって、広肇幫の出身地の華南の広東省方面との直接的関連はない。それだけに本別派は福建人の支配するフィリッピンから戦後とくに浙江系の進出をみている台湾方面を勢力範囲とし、戦後はとくに反共的態度を明確にしている。一九五六年十一月には台北市で本別派の集会の「中国洪門海外昆仲懇親大会」が開催されている。

これに対して、アメリカを支配する広肇幫系華僑の洪門団体は何れも少林寺派に属し、その政治的態度も複雑している。洪門団体にも籍貫（出身地）の相違、ひいては出先国の相違、政治的立場の相違から、分派の成立をみる場合のあることが明らかにされる。

ハ 堂会の実体

アメリカにおける広肇幫系華僑の組織する堂会は、前節にも明らかにした通り、少林寺派系の洪門団体である。吸血同盟という前期的様式をもって反清復明の革命的仲間組織としての骨格を保持している。

このような堂会の本源的な特性がもっとも効果的に發揮されたのは、アメリカの中国苦力移民入国禁止法と、アメリカの合興公司（The American China Development Company）⁹⁵ 粵漢（廣州—漢口）鐵路建設に対する借款契約反対のために展開された一九〇五年六月から八月にかけての対米ボイコット運動においてであった。⁹⁶

右のボイコットはきわめて効果的なボイコットとして成功を収め、中国移民排斥の原則は固執されたが、粵漢鐵路建設権の回収自弁には成功した。この運動には単に抗米的であるのみならず、清国政府の鐵路の国有国营主義に対する反清的、もしくは反官的氣風もつよく浸透していた。⁹⁷

司徒美堂（広東開平人、1866—1953）が熱血青年を集合してニューヨークに「安良堂」（安良工商總會）を「鋤強扶弱、除暴安良」の信条のもとに組織したのも右の一九〇五年の反米運動の時期に際していた。⁹⁸ ついで後述のごとくとくに辛亥革命、その後の日中戦争、戦後の国共対立に際しても遺憾なく堂会の政治的活動が發揮された。

洪門と自称する堂会は起源的には反清復明の革命意識、もしくはその後の旺盛な民族意識が民間の豪俠義氣の反官的氣風の上にもりあげられているべきである。だが、アメリカにおける堂会の現実には革命的、もしくは反官的な政治的組織というよりは、勢力範囲の画定、時としては反社会的活動へ逸脱してゆく場合も少くない。洪門と自称し、秘密結社組織を採用しているだけにその実体の把握は困難であるが、以下出来る限りその実体の概

容・輪廓の程度だけであっても明らかならしめてゆきたい。

アメリカにおける堂会の成立——先にも述べた通りアメリカにおける堂会は一八五二年設立された広徳堂がその嚆矢であり、その後清末における堂会についてマックレオドと司徒美堂はそれぞれ一二個をあげ、陳匡民は九個の最近の堂会名をあげている。今、ここに一九一三年サンフランシスコで刊行の「万国寄信便覧」に掲載されている堂会名には次の通りの一三があつた。

- 1 秉 公 堂——Bing Kung Tong
- 2 秉 安 堂——Bing On Tong
- 3 保 安 堂——Bo On Tong
- 4 致公堂公所——Chee Kung Tong Association
- 5 協勝堂公所——Hip Sing Tong Society
- 6 協善堂公所——Hip Sang Tong Society
- 7 忠義総堂——Ching Yee Tong Society
- 8 合勝堂公所——Hop Sing Tong Society
- 9 瑞端堂公所——Suey On Tong Society
- 10 萃勝堂公所——Suey Sing Tong Society
- 11 萃英堂公所——Suey Ying Tong Society
- 12 饑英堂公所——Yee Ying Tong Society

司徒美堂は堂会の総数は二、三十個を算するとしている。²¹⁾

なお、堂会はアメリカにおける広肇幫華僑の特有の組織であって、同じくアメリカのハワイ、その他カナダには今日の政治的党派としての致公堂以外には堂会の存在をみていない。合衆国本土の西部・中部・東部に群居成立する特殊的組織であるといつて差支えない。

アメリカにおける堂会成立について、司徒美堂はその多くは「義氣團結・守望相助」を信条とする相互扶助団体としてその当初には昆仲の保護を目的としていた²²⁾としている。アメリカへの苦力（猪仔華工）は郷里の田畑・家屋を売却うか、二、三十ドルの前借のもとに、手に布袋をもち、土布の便服をつけ、一条の辮髪をたらし、形容枯槁、埠頭にあがれば言語不通、出番人（華僑通訳）ひいては移民局・警察の不当の待遇をうけ、入国後も非衛生その他の名目のもとに住居を追われ、野宿して拘留されるもの一二千におよび、いわゆる「拉房」（家屋売買の周旋）事件さえ起こった。アメリカ資本主義発達初期における鉄道・運河の建設に原始山林の地帯に一四—一五時間の苦汗労働に従事する反面、アメリカ政府当局の不当な取扱いに対して、清国政府の叩頭外交からして何等の保護もなく放置されていた。このような事態に対処するために、三邑・四邑・中山・客家等の諸会館の長生会は苦力が死没した場合の喪事・回棺等の事宜を取扱っていた。²³⁾さらに、大姓の黃・李・陳・余・竜岡（劉・関・張・趙の四姓）等はそれ自体の有力な自衛組織を形成していた。

他面、小姓ないしは勢力微弱な団体しか形成しえない下層の多くの低賃銀労働者達は豪俠の領導のもとに、家長的な相互扶助の友愛団体として堂会を組織していった。堂会結成の動機は司徒美堂によれば、警察・移民局

の官員と出番人（華語通訳）の圧力を免れることにあつた。だが、その後は相互扶助団体というよりは、逆にアメリカ当局側の策略のもとに、堂が弱少の僑胞を圧迫し、その報讐となり、堂と堂との争執を導き、死傷者を出すところとなり、鬪争的団体へと変質化していったとしている。堂会の変質化の責任をアメリカ当局側に帰せしめてゐる。他面、アメリカ側の報告によれば、セツプアーヴ——Charles R. Shepherd の「堂」は「Association」, 「Society」, or 「Club」意味する中国語であつて、時としては「革新党」とうごとく「党」の意味を表現するためにも用いられる。だが、近頃ではこの言葉は——とくに太平洋海岸で——わが国語のうちにとりいられ、アメリカにおける華僑社会に存在するある種の嫌悪される危険な組織を表示するのに用いられるようになってきたといつて差支えない。』とし、ついで「堂」について『まず最初にあげられることは、これらの「堂」は社会的・慈善的諸目的のために存在すると主張するところの組織であるが、この「慈善団体」という言葉は華僑の犯罪者層のそれに屢々でてくるが、それは商業化した賭博・幼少女子の人身売買・阿片の密輸入・恐喝取財・不当価格請求・個人的復讐と殺害等の犯罪を助長し、犯さしめ、かつこれらの仕事に従事するものを保護するという特別目的のために組織されたものとしてである。これらの組織が全然何等の慈善的活動をしないとするならば、他面の事情からしてはげしい矛盾をも感ずることもあるが、アメリカ人であれ、華僑であれ、何かの意味で彼らの活動に通暁しているすべての人達は、右が実情であると認めるより仕方がないということである。』と述べ、⁶⁰「堂」が単純な慈善団体でなく、その反社会的活動の蔽うべくもない事実を指摘している。

アメリカ西部における東洋系移民の法的・経済的地位についての精緻な報告を作成したミアース・ Elliot Grimeal Mears は「堂」について、『「堂」は専ら会員の利益促進をはかる友愛的・政治的組織であり、他の「堂」

に對してはげしい對抗意識をもっている。一つ以上の「堂」に所屬しているものもある。サンフランシスコでは私は六つの「堂」に所屬しているものを知っている。彼は「堂闘」の際でも街路を堂々と安全に往来することができる。だが、これは高くついて誰でもがやれるわけではない。各「堂」は大規模の各州団体支部であつて、全會員は何処にいても相互扶助が保証されている。』とかなり緩和された見解を述べている。

堂会の反社会的活動がアメリカ当局の責任か、華僑側自体の責任であるのか、については幾多の問題があるろうが、少なくとも筆者がアメリカに滞在した一九五八——九一年間に直接見当をつけたところでは、とくに東北部の州では、なかば公然と番攤ファンテン（別名、四個テウ）という賭博が「堂」内で行なわれていた。当局側の寛大な処置のない限り不可能とさえ觀察された。右の事実も言語慣習に通曉しないこと、もしくは当該諸州当局の方針が公然と賭博營業を認めなくとも、個人的自由は侵害しないとの立場をとるものともうけとられた。マックレオドも早期のカリフォルニア州裁判所の弛緩と腐敗が、堂会の發展に少なからぬ責任のあつたことを認めている。

他面、アメリカ華僑の郷土の広東省において、清末徐勤が「粵東商務公司」設立の計画を明らかにしたとき、広東省での商務振興を阻止する事情のうちの一つについて次のごとく述べている。『印度の煙（阿片）を中国に售るは吾が粵（広東）より始まる。林文忠より煙を禁ずるも行なわれず、その毒を受くる者吾が粵をもつて最も巨しとなす。賭博の街は日に新たに月に異なる。甲申（一八八四）以後籌款、闖姓を急がして番攤に餉するあり、征して挙ぐるに粵は大なるあり、惟だ賭これ務め、終歳皇皇として正業を等つ。搢紳胥吏此れに借りて営私の具となし、市井小氓は是れに頼んで衣食の計をなす。煙を售り賭を市するの館は米薪の店より多く、煙を嗜み錢を意うの輩は食力の工より多し。』つづいて、その後文のうちに『粵省闖姓の業、六年の間に効に報ずること二

百二十万円、餉を納むること四百八十万円、亦た重しと謂うべし。』とあり、番攤の納税請負人であった關姓が巨額の税を納付していたことが明らかにされている。アメリカ華僑の郷土地方における阿片吸飲・賭博の盛行の風習が、堂会組織とともに自由主義的、個人主義的なアメリカの市民社会へはほとんど何等の抵抗もなく、そのまま移植されていったものとも解釈されうる。

何れにもせよ、アメリカの唐人街における「堂会」の成立は反清復明の革命意識により促進されたというよりは、当面の窮境打開の相互扶助団体から、堂会同志の勢力範囲をあぐる堂闘をこととする鬭争団体へ変質化していった。堂会のうち致公堂のみは例外であって、後に致公党として政党へ転換し、今日では北京での各民主党派のうちに華僑系政党として参加させている。致公党については後述にゆずる。

堂会の結成——堂会を組織するものは、華僑社会上層のいわゆる「買弁商人」や「高級官吏」ではなく、下層の製靴・製箱・製衣・葉巻製造・雜碎館オヤツラス・洗衣館等の職人・小商人達の小姓の姓氏を異にするもの達であって、堂会を工商会とも称するの、手職人・小商人の混成による結果といえよう。

司徒美堂も堂会の多くは「義氣團結・守望相助」を信条とすると述べているごとく、豪俠義氣のものを「大哥」として結成される。彼自身も安良堂の大哥であり、二丁拳銃を常持していたという。まず、洪門の結義方式により八拜の儀式が行なわれる。すなわち、「一拜天為父、二拜地為母、三拜日為兄、四拜月為嫂、五拜五祖、六拜万雲竜大哥、七拜陳近南先生、八拜兄弟和順」これであって、神前に雄鶏の首をはねて吸血訂盟の上、異姓であっても兄弟關係の仲間組織としての堂会が成立する。清朝は大清律例、卷二十三の律例「嚴禁異姓結拜弟兄」の条で、如上の洪門のごとき民間豪俠の徒が、任意に結成する兄弟組織を禁止していたから、当然秘密結社、す

なわち「会党」として取扱われていた。

マラヤでは洪門系の義興・海山・大伯公等の諸公司の長年にわたる械闘からして、イギリス政府は一八八二年危険社団条例——Dangerous Societies Ordinanceを公布して、洪門系諸団体の抑圧方針を明らかにしていたが、アメリカでは同様な結社禁止法の成立はみていない。

堂会は会友外には固く門戸を閉ざしているために、その内状は容易に明らかにしがたいが、今司徒美堂の叙述によれば、堂会には堂所があつて、各会友の集叙・休息・娯楽の場所となつてゐる。堂内の祭壇の中央には多くの華僑団体では関公が奉祀されるが、堂会では関公でなく岳飛と反清復明の洪門の五祖（少林寺派）と、万雲竜大哥（元師）とが供奉されている。

堂内兄弟は毎月一両元を月費として支払い、時として任意の機会に神壇上に「香油錢」の名義で出捐する場合もある。さらに、頼母子講に類する小貯蓄会的組織としての「標会」があつて、会友の余裕金を月毎に集め、「返唐山」（帰国）、店舗の開設等のため資金を急需するものが、当籤すればその後元利を逐次償還せしめる。この種の積蓄標会弁法が会友の成家立業に寄与していることは、姓氏団体の場合と共通している。

会友の数は三五百のもの、三五千のもの、最も多いのは安良堂であつて、会友二万余を算する。したがつて、安良堂が財政的にも恵まれ、ニューヨークのモット街——Mott Streetには大規模の安良大廈がある。

各堂には、総理・書記・財政・外交等の役員があり、会友が侵害をうけた場合は堂が出頭交渉し、代わつて解決する。堂友の疾病・葬事を救済し、老年のものゝ帰国には船費を援助する。司徒美堂の叙述する右までの経過は、相互扶助団体として輪廓を明らかにし、祭神の相違を除けば、他の血縁・地縁団体のそれともほば共通する

ものである。

何れにもせよ、堂会は洪門の秘密結社組織、ひいては兄弟的仲間組織を採用する点で、血縁的な自然的人的結合関係に相似するいわば「生死同心」の人的結合関係が設定される。それだけに堂会からの任意退出は困難である。もちろん、不行跡のある場合は退出せしめられることがある。その場合にも新聞紙上に「声明革除堂籍」として公告され、欠債の銀兩は永遠に追収するほか、他のいかなる社団に入会しても何等の保護を与えないことを声明し、華僑大衆に週知せしめる。また、たとえ昆仲自身が生計困難を理由として「堂籍自願退出」を紙上に公告しても、堂会側からは任意退出を承認することなく、依然として堂会々員であるとの反対声明を公告することが、今日でもしばしば華僑系新聞紙上に散見される。堂会の堂章の規定には、昆仲が堂籍の退出を欲する場合に、まず支堂の通過をへて総堂に転呈して、その批准によって有効であると定められていても、容易に自願退出の承認されないのが実情のようである。一旦、堂会に入会した以上は、堂会と生死をとにもすることは宿命的とさえ観察される。ただ、政治的に、ことに近年の国共の対立に際会して例外的にスプリットをみた場合がある。そのことについては後述にゆずる。

堂会は下層の手職人・小商人達の結成するものではあるが、労働組合とみなすことはできない。むしろ、別個に各業種別に組織される葉巻製造工人の「同徳堂」、製靴工人の「履勝堂」、製衣工人の「錦衣堂」、製箱工人の「公和堂」のときが、内部的になお家父長制は残存していても、単産としてみなしうであろう。堂会は弱姓・雑種工人・小商人が組織するものであって、反社会的事業にも進出するから「人的多数集団企業」ともみなしえられる。しかも、仔細に観察する場合、姓氏的・同郷的・同業的諸関係もからみあっているから、単なる労働

組合でもなければ、相互扶助団体でもない。たとえば、「饑英工商總會」（一九世紀末成立）が広東省中山県第八区の出身者で組織され、また既述のごとく、段英堂は中山籍、秉安堂・昭義堂・松石堂・西安堂は三邑（南海・番禺・順徳の三県）籍である。さらに、安良堂（一九〇五年成立、除暴安良から取名）は堂会中もともと富裕で各都市に二〇座の大廈をもち、堂員は二万を算するといわれるが、その堂友の多くは唐人街の比較的富裕な商人達により組織されている。他方、安良堂に対立する協勝堂（協力勝利から取名）は海員と貧窮華僑が多く、それだけに暴力的で打手が多いといわれる。堂会にも血縁的・地縁的・階層的宗派性が潜在している。

堂会の堂頭は郷土の風習を移植して、反社会的な賭館・煙館・妓館等の事業経営に勢力範囲を画定しながら集団的に進出した。賭博は広東人特有の番攤（フレンチ）（四個）・牌九（ドレイコ）・白鳩票（千字文開始八〇字を使用）等が行なわれる。前述の清末閩姓の税餉支払能力からしても、賭館が堂会のもっとも大きな収入源であることが理解される。阿片吸引の場所としての煙館は、一八四八年華僑進出の初期から始まったとさえいわれる。阿片は香港政府が請負人の復興公司を通じて公売するものが輸入されていた。清末、三藩市唐人街の華僑の阿片吸引者はその四〇％に達していた。アメリカの国会で阿片輸入禁止法の通過したのは一九〇九年であって、その後各国と同様の措置とともに、今日では阿片吸引者は漸減している。

妓館については初期の堂会の広徳堂（一八五二年設立）も、協意堂（一八五四年設立）の何れもは間もなく妓女の輸入業者に変質化していった。一八五四年協意堂の商販した女子数は六〇〇余名で獲利一〇〇倍から三〇〇倍に達したといわれるが、一八八二年の排華法公布以降はその入国者数も後退していった。⁸³⁾ なお、一八七〇年当時のアメリカ在住華僑女子数約二、〇〇〇名のうち正式の家族に属するものは一〇〇人程度にしかならなかった

とされている。その多くは広東の海上生活者の蛋戸か、香港の水鹹妹と称される大脚の女人達であった。³⁸⁾ 各堂会が右のごとき反社会的事業経営の勢力範囲をめぐる堂会相互間の闘争が、械闘、もしくは堂闘 ≡ Tong War として展開されていった。今日ではもっとも問題となっているのは、アメリカ広肇華僑の第一位の職業である洗衣業の開設、もしくは馬券販売に関するものである。なお、華僑洗衣業者の七〇％は手工洗衣館 ≡ Hand Laundry であって、³⁹⁾ 堂会の有力組成員となっている。

堂闘 ≡ 堂会の対立から堂闘への発展をみる場合は、一方から戦書、他方から応戦の文書が交換され、唐人街で堂闘が開始される。

堂闘による犠牲者数については、光緒十年代から民国十年代におよぶ三〇余年間に、サンフランシスコでは一〇〇余名、ニューヨークでは二〇〇余名を算した。⁴⁰⁾ 堂闘の大規模のものには、一八七五年度のサンフランシスコのウェーバーリー広場における広徳堂と萃勝堂との間の一婦女子をめぐる械闘、⁴¹⁾ ついで一八九〇年の三邑堂と萃勝堂（四邑系）との堂闘は最大規模のものであった。堂闘といひながら、資本家側の三邑幫と、労働者側の四邑幫との対立であって、清国政府からの仲裁官の派遣となり、三邑の堂頭の「Little Pete」が四邑側の打手に殺害されるのと同時に、総領事の仲裁で四邑と三邑の労資の和平が結ばれた。⁴²⁾ 最近年では、戦争直前までの安良堂と協勝堂との堂闘が目立ったが、辛亥革命後サンフランシスコの崗州公所主席の李宝湛の連絡のもとに「和平会」が結成されてから、堂闘は終熄をみていった。⁴³⁾ 武力的闘争としての堂闘は終末をつけても、なお堂会の若干の反社会的活動は継続され、今日でも堂会相互間の対立をみる場合のあることはいうまでもない。それは堂会が資本的結合というよりは、人的多数集団企業としての経済的競争・対立の一変型としても観察されうる。さらに、見すべ

されてはならないのは、堂会の政治的側面の対立・闘争である。

如上の堂会の勢力範囲をめぐる反社会的な堂闘のほか、反清復明の洪門団体としての本源的な革命意識に自覚めて、堂会が政治的党派として立ちあがってくる場合がある。その典型的な著例は辛亥革命に際して、孫文の登場とともに、大きな役割を果たした致公堂の場合であった。一九〇五年司徒美堂の設立した安良堂も、政治的に致公堂所属の青年達が、康有為・梁啓超の保皇党（保救大清光緒皇帝会）に対応するためのものであった。⁽⁴⁾ さらに、戦後は国共の対立からする致公堂の分裂をもみて今日におよんでいる。

以下、辛亥革命成立前後から最近の国共分裂におよぶ堂会の政治的側面について検討してゆくこととしたい。

- (1) 吳尚鷹編著「美国華僑百年紀実、加拿大附」第一六頁
孫甄陶著「美国華僑史略」第五頁。
- (2) Alexander McLeod, *Pigtails and Gold Dust*, Caldwell, Idaho, 1948, p. 229.
- (3) 司徒美堂口述「我痛恨美帝——僑美七十年生活回憶錄」一九五一年、光明日報社印行、第一頁
- (4) 司徒美堂口述、前掲書、第四〇頁
- (5) Alexander McLeod, *op. cit.*, p. 299.
- (6) 司徒美堂口述、前掲書、第四〇頁
- (7) 陳匡民編、「美洲華僑通覽」一九五〇年、紐育美洲華僑文化社印行
- (8) 平山周著、「中国秘密社会史」、中華民國元年、上海商務印書館、ならびに劉聯珂著「中国帮会三百年革命史」
- (9) 司徒美堂口述、前掲書、第四〇頁
- (10) 平山周著、前掲書、第二二——一九頁

三藩市唐人街の社会構造 (6)

- (11) 馬超俊編、「中国洪門海外昆仲懇親大会特刊」、中華民國四十五年、所載、紹虞「我所知的洪門起源」第一二五頁
- (12) 「国父遺経」、中華民國五十年、所載、「三民主義」第三篇、民族主義、第二七頁
- (13) 平山周著、前掲書、第二三——二四頁
- (14) 馬超俊編、前掲書所載、蕭一山「天地会起源考」、第九七——九八頁
- (15) 馬超俊編、前掲書所載、蕭一山、前掲論文、第一〇六——一〇七頁
- (16) 馬超俊編、前掲書、「洪門列祖列宗事蹟專輯」、第五三——七七頁
- (17) 一橋論叢、第三十二卷、第四号所載、内田直作論文「粵漢鐵路風潮の経過—辛亥革命の一断面」第四五—四六頁
- (18) 前掲内田直作論文を通じて、当時の広肇幫の反官的運動の経過が明らかにされている。
- (19) 司徒美堂口述、前掲書、第一四頁
- (20) International Chinese Business Directory of the World, San Francisco, 1913 「万国密信便覽」
- (21) 司徒美堂口述、前掲書、第三九頁
- (22) 司徒美堂口述、前掲書、第四〇頁
- (23) 司徒美堂口述、前掲書、第二——五頁
- (24) 司徒美堂口述、前掲書、第四〇頁
- (25) Charles R. Shepherd, The Ways of Ah Sin, p. 196.
- (26) C. R. Shepherd, op. cit., p. 199.
- (27) Elliot Grimeal Mears, Resident Orientals on the American Pacific Coast, Their Legal and Economic Status, Preliminary Report prepared for the July 1927 Conference of the Institute of Pacific Relations in Honolulu. p. 373.

- 29 A. McLeod, *op. cit.*, p. 251.
- 30 皇朝經世文新編、商政、第七冊、卷十三、徐勳「擬粵東商務公司所宜行各事」、第一四葉
- 31 皇朝經世文新編、前掲書、第一七葉
- 32 蕭一山著「近代秘密社会史料」卷二、第一三葉
- 33 Victor Purcell, *The Chinese in Malaya*, Oxford University Press, 1948, Chapter VIII, *Chinese Secret Societies in Malaya*, pp. 170—171.
- 34 司徒美堂口述、前掲書、第四〇——四一頁
- 35 伍揚誠著、「生活在紐育唐人街」、香港、一九五九年、第九〇——九一頁
- 36 吳尚應編著、前掲書、第一〇二頁、第三〇二——三〇六頁
- 37 吳尚應編著、前掲書、第九八——九九頁
- 38 Mary Roberts Coolidge, *Chinese Immigration*, New York, 1909, pp. 407—408.
- 39 吳尚應編著、前掲書、第九一——九二頁
- 40 伍揚誠著、前掲書、第三五——三六頁
- 41 司徒美堂口述、前掲書、第三九頁
- 42 A. McLeod, *op. cit.*, pp. 240—242.
- 43 Arnold Genhe, *Old Chinatown*, New York, 1913, pp. 134—136.
- 44 司徒美堂口述、前掲書、第四三頁
- 45 司徒美堂口述、前掲書、第一三——一四頁